

## 続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.42)

### 「疲れない者がゴールに到達できる」

・・・世界の祭典・W杯が始まった・・・

4年に1度のサッカーの祭典、第19回FIFAワールドカップ(W杯)南アフリカ大会が11日、開幕した。厳しい予選を勝ち抜いた各国の選手達が、自国や自己自身のプライドを賭けて、サッカー世界一を目指して戦う大会！そして、世界中がその熱い戦いに熱狂する、ワールドカップ！



サッカーW杯南アフリカ大会の開幕式典で行われた、航空機のアトラクション=11日、ヨハネスブルクのサッカーシティー競技場(共同)

4年ごとに開催されるW杯は地球規模の行事で、国際サッカー連盟(FIFA)は、大会期間中のW杯のテレビ視聴者は延べ約263億人に達すると予想しているという。(どの様にして推計したのだろうか？)

数字の確度は詮索しないとして、サッカー(当地では、フットボールという)は世界中で最もポピュラーなスポーツの一つと言われているとおり、現時点での世界人口約69億人強と比べても、その人気の度合いのすさまじさが、推定できようと言うもので、中南米諸国でもこのことは例外ではない。

街中の公園や空き地などで、サッカーに興じている大人や子供をよく見かけるが、低学年の子供でさえもしなやかな身のこなしでドリブルをし、それが実にサマになっている。

今はボールがなくて、缶詰の空き缶をけりあっている彼らも心の中では、「近い内に、おそらく、俺たちの運命はがらりと変わっているさ」、「将来ナショナルチームの選手になるのだ」というのもいるのではなかろうか。

このような底辺のすその広さばかりでなく、10万人規模で収容出来るサッカー競技場を建設したりなどする。もっとも、「ラテンアメリカのサッカー場が巨大なのは、政変やクーデターの度に大量の政治犯を収容するためさ」などと、皮肉を言う人も居たが、逆に考えれば混迷した社会を抱えた国では、日常生活のうさを吹き飛ばすことが出来る手段の一つが、サッカーなのかも知れない。

4年前の大会のときには、約90%の会社が観戦のためのテレビジョン視聴許可など、労働時間のフレックスタイム制を採用したという報道があったが、今回の対応でも似たような状況だろう。

私の勤務先でもメキシコの試合のある日は、大会議室に大型テレビを入れ、勤務時間中の観戦を認めたので、隣に座っている若い女の子でさえ、日頃の冷静振りから考えられぬほど、ワクワクしている様子が読み取れた。

メキシコは、世界の強豪国の一員だと自負しているお国ゆえ、チームが勝って当たり前と言う雰囲気の中で、開幕第一戦の南アフリカ戦での格下相手に引き分けて、いささかがっかりしていたが、これから勝ち進んでいけば国民はどの様な反応を示すだろうか。

もし今後メキシコと日本が対戦するようなことになったら、私の内なるアイデンティティとしての愛国心と、当地へ少なからず感情移入し始めている心とでどちらを応援するのか、頭を痛めるところであるが、ぜひその悩みをかなえて欲しいものである。

これを期待していたら、日本がオランダに惜敗し、次のステップへ進む確率が下がった状況になってしまっ



肩を並べて開幕戦を待つメキシコ(左)と南アフリカのサポーター(ロイター)

た。当地では日本の試合は見る機会が余り無いが、メキシコ流に「日本頑張れ! チャチャチャ (手拍子)」と思わず叫んでしまう。

サッカーにはずぶの素人で、W杯というと、下手なオヤジギャグと冷やかされようが、まず大好きなウイスキーダブル(W)の杯を連想し、つばを飲み込んでしまう。日本やメキシコが勝ち進んでいけば、ウイスキーの代わりに、テキーラのダブルの杯も必然的に量が増えると言うものだ。

今回のメキシコ対フランス選の例をレポートしよう。この日は、大学の視聴覚ルームで研究者達を相手に、講義をしていたのだが、部屋周辺に集まってくる試合を見たくてそわそわしている、他の研究者の数に押され、とうとう講義を中断して、サッカー観戦に切り替えた。みな喜びようと言っただけでなかった。

ボラッチョ氏も真面目一方だけの堅物ではない? ボリュームを目一杯高く上げた大型スクリーンとテレビのある、視聴覚ルームは大勢の研究者で埋まり、チャンスや決定的なゴールシーンでは、拳をふり上げ、口笛を吹き鳴らし大声で声援を送り、あたかも彼ら、彼女ら自身がその競技場に居るような雰囲気であった。

サッカーごときで仕事を犠牲にするとは何事だと、考えるのは日本流の発想だろうし、大会期間中は悪人どももテレビに釘付けになり、犯罪も減るだろうなどと友人達が話してくれたが、笑い話の類かもしれないが、あながち嘘でもなさそうだ。

格上のフランスにメキシコ代表チームが勝利した瞬間は、歓声あるいはそれに類するパフォーマンスは派手であったが、当所は大学という環境から周辺は意外と静かだった。

テレビ報道によると首都の騒ぎは最高潮だったらしく、中央広場に集まった大観衆は、様々な服装を凝らした人もいて、永遠に続くかと思ふ勢いで、「メヒコ、チャチャチャ(手拍子)、メヒコ、チャチャチャ」と騒いでいたようだ。

我が老妻も、メキシコ人の友人宅での刺繍の稽古事を中断して、レストランで昼食を兼ねたテレビ観戦と相成って、メキシコが勝利の瞬間には、友人に請われて、「ビバ! メヒコ (メキシコ万歳)、メヒコ チャチャチャ (手拍子)」を何度も言わされたりやらされたりしたと言う。

テレビでの観戦しか経験がないので、「講釈師見てきたような嘘を言い」的なことしか書けないが、球技場で繰り広げられているのは、スピード感あふれた、敵味方入り乱れた“格闘技”そのもののように見える。

観客も選手を格闘家と見なして最高のパフォーマンスを求め、彼らもそれに最大限答えようとして、一つのボールをめぐる、選手対選手、チーム対チームの戦いだけでなく、時には監督や自分自身との熱い闘いを繰り広げて、競技時間中フルに動き回る。

かつて、ボラッチョ氏が学生時代、国体県代表の一員に選出されたほど、熱中したバレーボールも、この動きと激しさには兜を脱がざるを得ない。二チームで一つの球体を奪い合い、それを敵のゴールネットを揺るがすという、球技自体が極めて簡単で、ルールもそれほど複雑ではなく、分かりやすい。

しかし、それだけに戦術的には駆け引きあり、連係プレーありで難しいのだろう。そこに「一瞬のドラマ」が



左:メキシコが点を入れたときの、視聴覚ルームを埋めた研究者達の歓声ぶり、右:大型テレビに映った大会場の応援風景

生まれ、悲喜交々のシーンが随所に見られる。ロスタイムのほんの一瞬の短い時間に運命が逆転したり、役割(ポジション)はそれぞれ決まっているが、ピンチやチャンス時には、その役割以上に全員で対応せざるを得ないなどの展開は、まるで企業活動の縮図を見ているようである。

まさにタイトルに使った、次の諺がふさわしい。

「**Alcanza quien no cansa**」(アルカンサ キーエン ノー カンサ と発音し、カンサの韻が素敵な諺で、直訳は疲れない者が(目的を)達成するという意味で、日本語の諺では、辛抱強いが勝ちと言うようだが、W杯にちなんで、少しカーブをかけてネットを揺さぶったタイトルにした)



インターネットの画像より

「すべてのスポーツには、少量のアルコールのように、少量のセンチメンタリズムが含まれている」と、作家 故三島由紀夫氏は東京五輪の年に書いたそうだが、サッカーには門外漢には分からない、少量どころか多量のナショナリズムを伴ったセンチメンタリズムがあり、害のない麻酔剤をかがされているようなものだろう。

民衆的な喜びごとがあると、人々が自然発生的に飛び出してきて大通りを埋めたり騒ぐのは、何も中南米ばかりの専売特許ではなさそうである。

中国において、二世紀末から三世紀後半にかけての歴史書である、三国志の後漢書・董卓伝の中に、「百姓(ひゃくせい)道に歌舞する(喜んだ人々が道に飛び出して歌い、踊る・・・喜んで大騒ぎする形容)」とあるように、いにしへの太古から興奮すると大騒ぎするのは、人間の本来持っている本能なのかもしれない。

しかし振り返ってみると、日本が何かの国際大会で1勝した時や優勝したときに、この様に国民一丸となって熱狂したことがあったらどうかと考えた。一部の関係者や地元では確かに騒ぐだろうけれどそれだけである。例えば、先の野球の世界一のときはどうだっただろうか。事の善悪は別としてまるで醒めていたようだが、日本人の不可解の一つにあげられるという。

国民性の違いとはいえ、みんなで熱狂できるものがないのだろうか。但し、戦前の日本のように、スポーツ以外における一握りの人たちの誤ったナショナリズム的熱狂で、国を滅ぼされたようなものでは、国民としては救われないが。

何処のテレビのチャンネルを回しても、アナウンサーの興奮した絶叫の、「ゴールルルル！ ゴールルルル」の声を聞きながら、タイトルに記した意志とは反対に、一日の講義と個別指導で疲れ果てた一よぼよぼ老人が、一人静かにホテルの食堂でテキーラの杯を重ねるのであった。

(2010年6月22日、今週は、来週からの地方出張講義のための準備をしています)